

## 春秋学基本語集 (一)

岩本憲司

本稿は、百科事典類はもとより、中国専門の事典にもあまり載せられていない、春秋学関係の基本語を集めて掲げ、事典風に簡潔な解説を附したものである。

## 【春秋】

①春秋時代の列国の公式年代記の通称。春秋時代、列国では、史官のもとに国家の大事の公式記録が蓄積されていたようであり、それらは、『孟子』離婁下篇に「晋の乗」「楚の檣杙」「魯の春秋」とあるように、それぞれ独自の名称で呼ばれることもあったが、『墨子』明鬼篇に「周の春秋」「燕の春秋」「宋の春秋」「齊の春秋」とあるように、通じて「春秋」と呼ばれた。年歳に従って記録されたことから、

本来年歳を意味する「春秋」（春夏秋冬の略）が呼称として使用されたものと思われる。これらの年代記は残存していないが、『春秋』経から、あるいは、戦国時代のものだが、『竹書紀年』から、その体裁をある程度うかがい知ることが出来る。また、『国語』楚語上・晋語七に、「春秋」を学習し、教えた、という記事があり、これによって、春秋学成立以前の「春秋」の利用法も知ることが出来る。

②儒教の經典の一つ。上記の「春秋」の利用法は、過去の歴史を現在への鑑戒として見るという、素朴な段階のものであったが、その後、儒家の間に、「春秋」に関する全く別の觀念が生じて来た。それは、『孟子』滕文公下篇・離婁下篇に始め

て見えるもので、孔子は、魯の年代記「春秋」を書きかえて、『春秋』経を作り、そこに義をこめた」というのである。現代の目からみれば、『春秋』経は、多少整理の手が入っているにせよ、魯の年代記「春秋」がほぼそのまま伝わったものとか言えないが、当時の儒家は、「春秋」と『春秋』との間に、孔子を介在させ、『春秋』経という理念上の存在を設定したのである。かくて、対象はこの『春秋』経にうつり、それにかかわる営爲も、学習し、教える、ということから、孔子がこめたとされる義を解明する、という複雑な経学的営爲に変化し、ここに所謂「春秋学」が成立するのである。

③国家の年代記ではなく、一般の社会事

象や個人の事蹟などを記したものの。例えば、『呂氏春秋』『虞氏春秋』『晏子春秋』等。

## 【春秋学】

儒教の經典の一つ『春秋』に関する解  
釈学。孔子は、史官が記録した魯国の年  
代記である「春秋」を筆削して（書きか  
えて）『春秋』経を作った、つまり「微言」  
（微妙な言い回し、一種の暗号）によって、  
『春秋』の中に「大義」（自分の政治上の  
理想）をこめた」という認識を大前提と  
して、その「微言」を解読し、「大義」を  
明らかにしようとするもので、はやくは、  
『孟子』滕文公下篇・離婁下篇や『荀子』  
勸学篇・儒效篇に記載が見られ、戦国時  
代の儒家に始まったと考えられる。そし  
て、漢代になると、「微言大義」は実は  
孔子の漢への遺言であり、『春秋』は漢の  
ために作られた」という認識（春秋漢代  
制作説）が加わり、ここに、春秋学の最  
初の成果である『公羊伝』（伝とは解釈の

意）が出現する。つまり、『公羊伝』は、  
劉漢帝国の国家学の教科書として提出さ  
れたものなのであり、これをうけて、『公  
羊伝』を中心とする儒教による思想統一  
を武帝に献言したのが、董仲舒である。  
ところで、暗号を解くにはコード（義例）

が必要であるが、春秋学の場合、そのよ  
うなものから存在せず、コード自  
体を解読者が設定するため、解読の結果  
は恣意的なものとならざるを得ない。春  
秋学の創造力の源がこの点にあるとも言  
えるが、そのため学派の分裂も避けられ  
ず、案の定、宣帝期になると、『公羊伝』  
に対抗する勢力によって、『穀梁伝』が提  
出され、一時、学官に立てられたりもし  
た。なお、『公羊伝』といい、『穀梁伝』  
といい、その方法は同一であり、暗号を  
解読して義を明らかにする、というもの  
であるが、『春秋』は本来、年代記であり、  
事件が記されているから、その事件の詳  
細を検討することによって間接的に義を  
明らかにする、という方法が案出されて

もおかしくない。実際、前漢末になると、  
戦国時代に集められた史話・説話集を資  
料として『春秋』を解く書物が出現した。  
それが『左氏伝』であり、以後、『公羊伝』  
の好敵手となった。

## 【微言大義】

春秋学を根底から支える基本ターム。  
『漢書』芸文志に「昔、仲尼没して微言絶  
え、七十子喪じて大義乖く。故に、春秋  
わかれて五となり、詩わかれて四となり、  
易に数家の伝あり」とあるように、諸経  
を通じて使用されることもあり、この場  
合、「微言」とは、奥深い言葉の意で、  
「大義」とほぼ同意であるが、『荀子』勸  
学篇に「礼の敬文、楽の中和、詩書の博、  
春秋の微、天地の間にあるもの畢く」と  
あるように、『春秋』の特質が「微」と規  
定されることから、特に『春秋』につい  
て使用されることが多く、この場合、「微  
言」は「大義」にかかり、「微言大義」と  
は、微妙な言い回しによって暗示された

大義の意である。つまり、孔子は微妙な言い回し(一種の暗号)によつて『春秋』の中に大義(政治上の理想)をこめた、ということであり、このような認識を大前提として、その「微言」を解読し、「大義」を明らかにしようとしたのが、所謂春秋学(特に公羊学)なのである。

### 【三世】

春秋公羊学の基本タームで、「張三世」とも言う。『公羊伝』隠公元年等に「見る所、辞を異にし、聞く所、辞を異にし、伝聞する所、辞を異にす」とあるのに基づき、孔子は『春秋』の隠公から哀公に至る一二公二四二年間を大きく「所見の世」「所聞の世」「所伝聞の世」の「三世」に分け(それぞれ書き方を変え)ている、とする解釈。何休によれば、「所見の世」とは、孔子自身と父の時代で、昭・定・哀にあたり、太平の世、「所聞の世」とは、祖父の時代で、文・宣・成・襄にあたり、升平の世、「所伝聞の世」とは、高祖父・

曾祖父の時代で、隠・桓・莊・閔・僖にあたり、衰乱の世である。つまり、孔子は『春秋』に於いて、「三世」を設定し、時代は、衰乱から升平へ、升平から太平へと進化するという歴史観を暗示している、ということであり、何休が、このよ  
うな、史実とは全く逆の解釈を案出した理由は、当代の漢こそがこの「太平」の段階にあることを示さんがため、と考えられる。

### 【何休】

一二九(永建四)〜一八二(光和五)。後漢の学者。任城樊(山東省)の人。字は邵公。生来、朴訥であつたが、意志が強く、父が少府であつたお陰で郎中を拜命しても、病氣を理由にことわり、ひたすら六経を研鑽して、当時及ぶ者がなかつた、というから、純然たる学究肌のようにも見えるが、現実の政治への関心がなかつたわけではなく、その証拠に、政治改革をめざす陳蕃が大傅に任ぜられる

と、その辟召に應じて、政事に参与している。しかし、まもなく陳蕃は失脚し、彼も党禁に坐した。以後、党禁が解けるまでの十余年、彼は再び学問の世界にもどり、門を閉じて著述に専念し、この間に成つたのが、主著の『春秋公羊経伝解詁』であるが、その外、他の二伝に対抗すべく、『公羊墨守』『左氏膏肓』『穀梁廢疾』を作り、また、『孝経』『論語』等に注釈を施した。なお、『春秋』によつて、漢の政治を六百余条にわたつて駁した、ともいわれ、最後まで現実批判を忘れなかつた。後漢書七九下。

### 【春秋公羊経伝解詁】

後漢の注釈書、十二卷。何休著。『春秋経』と『公羊伝』とについて、諸々の事故(ことがら)を解釈したもの。その特色は、「五始」「三科九旨」「七等」「六輔」「二類」(疏に引く何休『文諡例』)等の義例の導入による創造的解釈にある。創造的解釈は、董仲舒から緯書をへて何休に

至る公羊学の伝統であり、その根底には現実の政治への強い関心が存するが、前二者のそれが漢革命の正当化であるのに対して、何休のそれは漢太平の保証であった。

### 【杜預】

二二二（黄初三）～二八四（太康五）。西晋の学者、政治家。京兆杜陵（陝西省）の人。字は元凱、諡は成。司馬昭の妹婿。

律令の制定、異民族の平定、経済政策の施行など、様々な分野で大活躍し、「杜武庫」（ないものはない）と称せられ、特に呉の平定の功によって、死後「征南大將軍」を追贈された。また、「臣に左伝癖あり」と自称するように、若い頃から『左伝』に傾倒し、晩年に至って、大著『春秋経伝集解』を完成させた。晋書三四。

### 【春秋経伝集解】

西晋の注釈書、三十卷。杜預著。それまで別行していた『春秋経』と『左氏伝』

とを集めて解釈したもの。その特色は、恣意的な解釈を排し、あくまで伝に依拠して実証的、帰納的に経を解釈しようとしたことにあり、春秋学に革命的転換をもたらしたが、その結果、『春秋経』は、孔子の創作というよりも、周公の礼制をうけた史官の記録とみなされ、ここに、経学としての春秋学は解体されて、一種の史学として再生することになった。

### 【范甯】

三三九（咸康五）～四〇一（隆安五）。東晋の学者。順陽山陰（湖北省）の人。字は武子。礼教の擁護者として活躍し、文章の上では「王弼何晏論」によって当時の玄学尊重の風潮を強く批判し、また、行動の上では、自ら求めて予章太守となり、郡学の設立など、儒教の振興につとめたが、就中、彼を有名にしたのは、はじめ、甯、春秋穀梁氏に未だ善釈あらざるをもつて、ついで沈思すること積年、これが集解をつくる」という、『春秋穀梁

伝集解』の著作によってである。晋書七五。

### 【春秋穀梁伝集解】

東晋の注釈書、十二卷。范甯著。一族や門生故吏とともに六経を研究した成果であり、自説の他に、諸子の解釈を集めて、各々その姓名を記したものである。その特色は、必ずしも穀梁伝文に固執せず、理に據りて以て経に通ずる」という、自由で柔軟な態度にあり、時には、伝文の矛盾を指摘したりもしている。なお、この書には、杜預の『集解』の引用も多く、その影響と思われるが、経学的アプローチから逸脱した、いわば史学的アプローチも散見する。

### 【大一統】

『春秋公羊伝』隠公元年にみえる言葉。「大」は、たつとぶの意。「一統」は、統一と同じで、全てがある一つのものに繋がるの意。董仲舒が、「天地の常経、古今

の通誼なり」(漢書五六)として、特に重視して以来、春秋学の基本タームとなつたが、それに伴い、「一統」も、時の王者による思想・法度等の統一の意に敷衍された。そして、後世には、「大」が形容詞化されて、大なる統一の意としても使用されるようになった。

### 【三科九旨】

春秋公羊学の基本タームで、孔子が設けたとされる『春秋』の義例。『公羊伝』原目疏に引く春秋説(緯書)にみえる。異説(宋氏の注)もあるが、何休によれば、周を近い過去の王とし、宋を遠い過去の王とし、『春秋』を新王にあてる。これが一科三旨。見た時代と聞いた時代と伝聞した時代とで、書き方を変える。これで二科六旨。魯を内にして諸夏を外にし、諸夏を内にして夷狄を外にし、夷狄が進んで爵に至る。これで三科九旨である。

### 【三世異辭】

春秋公羊学の基本タームで、孔子は『春秋』に於て、時代を大きく三つに分け、それぞれ書き方を変えている、という解釈。『公羊伝』隱公元年等に「見る所、辭を異にし、聞く所、辭を異にし、伝聞する所、辭を異にす」とあるのに基づく。なお、「三世」については諸説あるが、何休によれば、自分と父、祖父、そして高祖父・曾祖父の時代である。また、「異辭」の理由は、何休によれば、時代の遠近に伴つて恩愛の度合が異なるからである。

### 【五始】

春秋公羊学の基本タームで、『春秋』経文の冒頭「元年春王正月公即位」の九文字を分割した「元年」「春」「王」「正月」「公即位」の五つをいう。三科九旨等と同じく、疏に引く何休『文諡例』に見え、隱公元年の何休注で、それぞれ、天地の始であり、歳の始であり、人道の始であり、政教の始であり、一国の始である、

と説明されている。なお、この説は、董仲舒には未だなく、緯書あたりから始まり、何休がそれを取つたものと思われる。

### 【緯書】

緯は本来、経(たていと)に対するよこいとの意で、「緯書」とは、経書を補助するものであるが、独自の内容も豊富である。就中、感生帝説や異常風貌説等の神秘思想が特徴的であり、そのような風潮が強かった前漢末(哀平の際)から後漢初にかけての時期に集中的に出現したと思われるが、現在、断片の形でしか伝えられていない。今文学、特に春秋公羊学との関係が深く、何休の公羊注(解詁)には、緯書の説が数多く引かれている。

### 【災異説】

天人相感思想ともいい、天(災異、つまり自然現象)と人(人間社会の出来事)とは、共通の要素である陰陽や五行を媒介として感応し合うとする説。人とは、

君主とその周辺の場合が多いから、君主権を抑制するための理論であるとする評価もあるが、むしろ君主権を強化（神秘化）するための理論と考えられる。『春秋』経文には災異の記事が多いから、その解釈には災異説がしばしば利用され、具体例は、『漢書』五行志や公羊の何休注で見られる。

### 【経今古文論争】

漢代に於ける今文学派と古文学派との対立・抗争をいう。本来、今文とは漢現代通行の文字（隸書）のことであり、古文とはそれ以前の古文字のことであるが、両学派は、単に文字の相異のみに止まらず、テキストとその解釈の相異、依拠する経伝の相異、さらには思想（特に孔子と六経との関係）の相異によって、ことごとくに論争した。春秋学で言えば、今文学派は先出の『公羊伝』を奉じ、古文学派は晩出の『左氏伝』を奉じた。

### 【経学】

経とは本来、先秦の諸学派がそれぞれに基本とした綱要の書をさすが、経学という場合の経とはそのなかの儒家のものに限られ、しかも時代的に降って儒家が独尊の地位を得、儒学が国教化されていわゆる儒教となった前漢期以降についていう。つまり、儒教の經典のことである。そして、このような経に関する創造的解釈にもとづく注釈を中心とした、二千年にもわたるもろもろの知的営為を経学と呼ぶ。その本質を一言で規定するのは難しいが、あえていえば、総合を方法とし、致用を目的とする国家学であり、春秋学もこのような経学の一つである。

### 【董仲舒】

前一七〇頃～前一二〇頃。前漢の学者。広川（河北省）の人。所謂経学は董仲舒に始まったと言える。それは、儒学の国教化が、彼の武帝への「対策」によるものであったからであるが、就中、彼自身

の春秋公羊学つまり『春秋』経伝の創造的解釈に基づくものであったからである。彼の春秋学は、先行の儒家はもちろんのこと、道家・法家・墨家・陰陽家などの思想をも取り入れるという、いわば総合をその方法としており、また、春秋漢代制作説に明らかのように、いわば致用をその目的としていて、まさしく経学の本質をはじめて備えたものであった。

### 【三統】

統は本の意。三正（正は曆のこと）とも呼ばれ、建子の月を正月とする天統（色は赤）、建丑の月を正月とする地統（色は白）、建寅の月を正月とする人統（色は黒）の三つをいう。董仲舒は、この三統を実際の王朝にあてはめて、夏は人統、殷は地統、周は天統とし、さらに、春秋解釈に応用して、「春秋は天に応じて新王の事をなす。時は黒統を正とし、魯を王として黒を尚び、夏を緋け周を親として宋を故とす」（『春秋繁露』三代改制

質文篇) とした。つまり、夏(人)・殷(地)・周(天)を一つ繰り上げて、夏のかわりに新王(実は漢を指す)を入れ、殷(地)・周(天)・新王(人)としたのである。これを「存三統」という。

### 【素王】

素は空の意味であり、「素王」とはつまり、王の地位にあらずして王たるものということである。董仲舒の対冊に「孔子は、春秋を作り、先ず王を正して万事を繋げ、素王の文をあらわす」とあるように、主に孔子について言われ、一般に「孔子素王説」と呼ばれる。はじめは、そう認定(他称)されるだけであつたが、緯書(前漢末)になると、孔子は「素王」であると自称したことになり、孔子の神秘化・帝王化が進んだ。

### 【空言】

『史記』太史公自序に「子曰く、我これを空言に載せんと欲するも、これを行事を

にあらわすの深切著明なるにしかず」とあつて、往行の成事、つまり具体的な行為の迹を意味する「行事」に対して、抽象的な言辞を意味することば。従来、この文章は、『春秋』経の表現方法を説明したものと解されてきたが、前半(空言)が『公羊伝』の表現方法を指し、後半(行事)が『左氏伝』の表現方法を指している、と考える方が適切であろう。つまり、この文章は、『左氏』が『公羊』にまさっているという、『左氏』の宣伝文句なのである。となると、実はこの文章自体の晚出性も考えられる。

### 【属辞比事】

『礼記』経解で六経の特徴を順次述べる中に「属辞比事は、春秋の教なり」として見える。一般には、『春秋』の事件(事)とその記録法(辞)とを集め比較することによって、春秋の義を明らかにすること、と解されている。つまり、公羊・穀梁の二伝について言ったものとされてい

るのであるが、果してそうか。虚心に読めば、単に「辞をつづり事をならべる」ということであるから、史事を書き記すということに過ぎないのではないか。だとすると、この言葉と密接な関係にあるのは、むしろ、史事を重視する左氏伝の方であると考えられ、そうになると、経解の晚出性の問題も浮上して来る。

(本稿は、二〇〇六年度跡見学園特別研究助成費による研究成果の一部である。)